

「希代っ！」

また、清次が、咎める声をあげた。

「よいではないか……。希代は、まだ、子どもじゃ……。」

「父上は！……また、そうやって、希代を甘やかす……。」

「そうですよ。」

お酒のトックリを換えにきたハツが、清次に助け船を出す。

「もう姫様の年なら、都では、花嫁修業をしてもおかしくない頃でございます。もう少し、おしとやかになさいませ。」

「かまうものか！……希代は、都のぼんくら貴族なんぞには、やらん！」

清重は、酔眼を安珍の方に、向けた……。

「のう……安珍？」

……と、急に振られても、安珍には答えようがない。

言いながら清重は、膝に座った清姫の髪を撫でている。

「わしは、女子を幸せには、出来なんだ……。清次の母も……希代の母も、わしは、若くして殺してしまった……。」「

清重は、安珍に語りかけるように話しはじめた。

「希代の母はの……。さっきの希代とそっくりな美しい白拍子じゃった……。山賊どもに襲われておつたのを、わしが助けて嫁にした。

じゃが……。わしは、希代の母の声を聞いた事がない……。希代の母は口が利けなんだ。

もちろん、白拍子じゃったのだから、はじめから口が利けなかったとは思えぬ……。おそらく、乱暴されたせいで、口が利けんようになってしまったんじやろう……。」

「字も書けんだから、名前もわからぬ。素上も知れぬ……。じゃが、漣は……。漣……。というの、わしが名付けたんじやが……。身体が回復して来ると、かいがいしく働いて、わしや、清次の面倒をよくみてくれた。」

「そのうち、この希代が生まれた……。あの頃のわしは、今、思えば、一番幸せじゃった。」

反射的に、清重は、膝の上の清姫を抱きしめる……。

清姫は、不思議そうに、清重の顔を見上げている……。

「さっき、希代が吹いておつた笛は、漣の形見じゃ……。漣は、子守唄が歌えぬかわりに、あの笛を吹いて、希代をあやしておつた。

わしは、漣を、この滝尻の神の使いのように思うておつた……。岩田川の清流が、女子に変化して……。わしに、交合てくれたのではないかと……。